

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月31日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820057

研究課題名（和文） 古代カンボジアにおける交易ネットワークの発達と
統治システムに関する研究研究課題名（英文） A Study of the development of trade networks and
the ruling system in ancient Cambodia

研究代表者

松浦 史明（MATSUURA FUMIAKI）

上智大学・大学院グローバル・スタディーズ研究科・特別研究員

研究者番号：00584707

研究成果の概要（和文）：本研究では、9～14世紀に東南アジア大陸部に栄えたアンコール王朝の交易ネットワークのあり方を、交易圏・交易路・交易に関わる人とモノ・交易と王権および宗教との関係という視点から考察した。その結果、アンコールの交易は10世紀末から東南アジア域内の交流を主として展開し、12世紀末からのジャヤヴァルマン7世期に外世界との交通が本格化したことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to consider the issues related to the aspects of the trade networks in the Angkor dynasty, which prospered 9th-14th century in the mainland Southeast Asia, from the viewpoint of the trade area and its routes, persons and goods, and the relationship with the kingship and the religion. It was found from the result of this study that the trade of Angkor was developed from the end of 10th century mainly on the internal trade networks in Southeast Asia, after that, the exchange with outer regions flourished in the age of Jayavarman VII, from the end of 12th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：東南アジア史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：カンボジア・アンコール王朝・交易史・王権

1. 研究開始当初の背景

インドー中国の交通と交流を考える上で、東南アジア地域をどのように位置づけるかは常に大きな命題であった。東南アジア各地に存在した中心地（港市、都城）をインドー中国間交易の通過地点と見るか、交易拠点と考えるか、これまでに様々な議論があった。アンソニー・リードの『交易の時代の東南アジア：1450～1680年』によれば、東南アジアは15世紀から「交易の時代」に入り、海上交易を通じたネットワークが発達したといわれるが、東南アジアはあくまで香料等の

産物を供給する地域としての理解がなされ、東南アジア内部でどのような需要があったのか、つまり東南アジア地域の交易品消費地としての性格は十分に考察されてこなかった。またアンコール史研究においても、王統・王権・宗教等に関する研究が中心であり、交易に関する視点が欠落している。

12世紀に最盛期を迎えたアンコール王朝は、数多くの大型石造寺院を生み出した。その人口は世界的にみても有数の規模を誇ったとされる。アンコール王朝が、他国との関連なしに単独で成立しえたはずはない。また、

東南アジア交易は、外部（中国・インド等）との関連だけに注目するべきではなく、東南アジア域内でどのような交易ネットワークが形成されていたのかをまず考えるべきである。その中で、アンコール王朝は重要な消費地の一つとして富を集積する役割を果たしたのではないかと想定される。

2. 研究の目的

本研究では、9～14世紀の東南アジア大陸部に栄えたアンコール王朝の交易ネットワークのあり方を、思想的・制度的背景も含めて検討することで、アンコールの交易が当時の統治システムの中で果たした機能と役割を明らかにすることを目的とする。

そして、これら交易のあり方のものの歴史の変遷を追うことで、新しい側面からみたアンコール王朝の興亡を明らかにする。最後に、こうして明らかになったアンコール的交易モデルを地域間で比較することで、東南アジア全体の交易のあり方の変遷を論じたい。

3. 研究の方法

漢籍とアンコールおよびインドの碑文を原文で読み、アラブ・西欧語資料、考古資料、図像なども援用しながら考察する。

特に碑文に関しては、近年発掘された新碑文の解読とともに、これまでの技術では判読不能であった摩滅した碑文を解読するため、三次元デジタルイザ等の最新技術を用いた史料収集を行う。

アンコールにおける交易は、経済・宗教・政治などの要素が渾然一体となっているため、碑文・漢籍等の文献史料のみならず、図像、考古資料などの関連諸史料や植物学などの自然科学の知見を援用しつつ議論を行う。

4. 研究成果

(1) アンコールの領域について

本研究ではまず、アンコールの交易圏を検討するため、当時の領域観について碑文と漢籍等を比較しつつ考察した。その結果、漢籍においてアンコールを指す「真臘」の地理的位置や真臘の属国とされる地域を含んだ範囲は、碑文や建築、彫像等で確認されるアンコールの範囲より広く捉えられていることが明らかになった。さらに、属国の産物が真臘の産物として中国市場に入っていたことが史料から示唆されており、このことから考えると、中国人が認識していた真臘とは、アンコールの国家としての政治的範囲というよりも、経済的な地域圏として想定されることが示唆された。また、この経済的な地域圏と、アンコールの直接的な政治的支配が確認される地域圏との間には、碑文は確認されていないものの、同一様式の建築や彫刻などがみられる、いわば文化的同質性をもつ地域が横

たわっていた。このことから、これらの政治的な版図、文化的な影響範囲、経済的地域圏が複合してアンコールの領域が形作られており、これが中国人に真臘として認識されていたことが確認された。

以上のことから、アンコールの交易ネットワークを域内流通と対外交易の視点から考察するにあたり、上記の重層的な地域圏の消長を時代ごとに分析し、個別具体的に検討する必要が指摘され、これまで一様かつ静態的に捉えられてきたアンコールの交易に関する議論を、アンコールの政治的変遷や統治システムの議論と関連させながら進展させる素地ができたと考えている。

(2) 交易ルートについて

交易ルートについては、特にいわゆる「王道」と呼ばれる陸上幹線ルートの踏査を行い、陸と海のネットワークを通じた域内流通と外世界との関わりについて検討した。その結果、これまで陸上交通の整備は12世紀末のジャヤヴァルマン7世の業績に帰されることが多かったが、その祖形は10世紀末のラージェンドラヴァルマン期からみられることが確認され、11世紀以降のアンコールの領土拡大と陸上交通ネットワークの発達が緊密に連動していたことが明らかとなった。

また、ラージェンドラヴァルマンと次代のスーリヤヴァルマン1世の時代には、コー・ケー（アンコールの北東）への遷都とその後のアンコールへの復都、二王が並立する内戦状況などがあり、これら国内の政治的混乱を乗り越えていくなかで、域内流通ネットワークが構築されていったと理解されるべきであることが指摘できる。

他方で外世界との関わりについては、特に中国との関係を考察した。11世紀以降、各種の漢籍において真臘に関する具体的な記述が増加することから、対中国関係の隆盛がみてとれるが、碑文にみられる中国関係記事を見ると、11世紀以前の碑文には、アンコールの版図の広大さを示すために「中国にいたるまで」王国が広がっていたなどと記述されるのみであり、具体的な政治的関係や中国製品の流入についての記述はみられない。その後、「中国の鏡」など少量の奢侈品が碑文に散見されるようになり、「中国の蓆」など日用品を含んだ大量の中国製品の利用はアンコール末期のジャヤヴァルマン7世期になってやっと現れることが明らかになった。

このことから、ジャヤヴァルマン7世期以前には中国との密接なつながりを示す明示的な痕跡を碑文から見出すことは困難であり、少なくとも碑文を書き残すような政治・宗教エリートにとっては、王朝末期に至るまで域内流通に対する関心が主であったことが示唆された。

今後、貿易陶磁研究などの考古学的研究が進展することによって、より具体的な流通のあり方が明らかになることが期待される。

(3) 交易に関わる人とモノ

アンコールの碑文には、商人や市場に関する記述に乏しく、その具体的な様相を知ることが困難であった。碑文には、サンスクリット語を起源とし商人を指す古クメール語の「vanik」という語が8世紀から12世紀にかけて6例みられるのみであり、そのほとんどが「商人」の存在を示す以上の知見を得られないものである。しかし、「商人の長」や「商人の地区」などといった語がみられることから、何らかの組織化された商人集団か、ある程度の王権の商業への関与がみてとれる。また13世紀末の『真臘風土記』には、市場で商いをする際には場所代がとられることが記されており、少なくとも王権が商業に無関心であったとはいえない。しかし、その制度的変遷などを追うには史料があまりにも不足しており、本研究においても具体的な像を描くには至らなかった。

次に本研究では、碑文に記された寺院への寄進目録を検討し、交易されたモノについて考察した。特に碑文に書かれた中国製品についてみてみると、前述した通り11世紀に中国の鏡などの工芸品が寺院に寄進されるようになり、12世紀末のジャヤヴァルマン7世期にその数量が増加することが明らかとなった。

しかし、ジャヤヴァルマン7世期以前にもアンコールの産品ではないと思われる香料や工芸品が寺院に寄進されている。これらの多くはアンコールの「属国」を含む域内ネットワークに乗って各寺院への運ばれたと考えられるが、これら寄進品の同定と流通については、他地域の碑文等をも詳細に検討する必要があるため、今後の課題となった。

(4) 交易と王権・宗教

最後に、上記までで明らかとなった交易の諸相に国家がどのように関わっていたのかを検討した。

アンコールの交易が活発化する10世紀末以降の時代状況について特筆すべきこととして、それまで王の名のもとに書かれていた碑文が、高官や地方有力者によっても残されるようになり、王に言及しないいわば私的な碑文が増加することが挙げられる。

このことはアンコール社会の多様化を示すものであり、上記までで明らかにしてきたような、寺院を通じた経済活動に関しても王が積極的に関与した証拠は少ない。つまり、王権の交易への関与は直接的なものではなく、各地方の有力者などを介した重層的な統治システムのなかで交易活動が行われてい

たと考えるべきであろう。

しかしその後、中国との交易関係が具体化するジャヤヴァルマン7世期に至り、再び王による碑文作成が増加し、王の名のもとに交易品が寺院に寄進されるようになった。さらにジャヤヴァルマン7世は、それまで各地方でローカルに信奉されていた諸神を国家寺院パイオンなどに合祀することで、宗教的な多様さを王のもとにまとめ、王の権威を増幅していたことが知られている。このような王権の拡大と対外交易の活発化は、やはり無関係な事象ではないだろう。

アンコールの主要な史料は寺院に奉納された碑文であるため、交易活動などのアンコール社会に関する知見も宗教的な事柄と不可分である。そのような史料の偏向はあるものの、交易ネットワークの拡大と進展は、宗教を通じた王権の拡大と密接に関わりながら展開したと考える。

(5) まとめと今後の展望

以上のことから、10世紀末以降に本格化するアンコールの交易は、当初地方的なローカルな文脈で発展し、域内ネットワークの充実がまず図られたと考えられる。そして、国家あるいは王権による直接的な関与は12世紀末のジャヤヴァルマン7世期をまたなければならず、それと同時に中国などの遠距離交易の活発化が起こったことが明らかとなった。

今後は、東南アジア各地域の史料を検討することによって、10世紀末以降のアンコールの交易ネットワークの進展が、広域的な歴史的展開のなかでどのように位置づけられるのか検討していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 松浦史明、真臘とアンコールのあいだ——古代カンボジアと中国の相互認識に関する一考察、上智アジア学、査読有、第28号、2010、117-139

[学会発表] (計6件)

- ① 松浦史明、前アンコール期とアンコール期にみられる史料上の断絶と連続性について、東南アジア学会・東南アジア考古学会学際ワークショップ：紀元1000年紀のメコン河下流域の編年と文化に関する多角的検討、2011年1月29日、上智大学
- ② 松浦史明、デーヴァラージャ崇拝とその後——アンコール王権概念の変容、東南アジア学会第84回研究大会 パネル2「11世紀のアンコール再考—碑文・バライ・都市構造から、2010年12月5日、東洋大学
- ③ 松浦史明、古代カンボジア史の視点から：

アンコールにおける『ラーマーヤナ』の受容、東南アジア学会関東例会比較文明学会共催「東南アジア史のなかのインド、2010年11月20日、上智大学

④松浦史明、アンコールにおける個人崇拜と肖像の作成について、東南アジア彫刻史研究会、2010年9月24日、上智大学

⑤松浦史明、ラージャラージャ1世期の王権と寺院、東南アジア彫刻史研究会、2010年4月17日、大阪人間科学大学

〔図書〕（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 史明 (MATSUURA FUMIAKI)

上智大学・大学院グローバル・スタディーズ研究科・特別研究員

研究者番号：00584707

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし